

50年—“理工ボート”の思い出—

西 尾 吉 衛

10年一昔という言葉がありますが、これはラヂオもなかった昔の言葉ですから、月まで人間が飛んで行くことができるこの頃では、10年大昔というところでしょうか。

私が、ワセダの当時の名称でいえば、理工学部採鉱冶金学科を卒業したのは、昭和9年ですから、50年前、つまり昔流にいても五昔のことになってしまいました。先般、資源工学会総会（注：昭和59年4月27日開催）の通知を頂き、久し振りに出席しましたが、出席者名簿をみると私が最古参、次が16年卒の三井さん（注：三井精二氏、元・日重鉱業）で、その間の人は誰もお見えでないのには、一寸淋しい思いがいたしました。

ともあれその時出席された、恐らく多くの同窓の方々は、何とウス汚れた爺さんが現われたものだと感じられたことでしょう。私だって学生時代には、50才をすぎた先輩を見るにつけ、ずい分と爺さんが、と思ったものですから、75才の今の私を見た若い方々にしてみれば当然のことです。

お話によると、資源工学科になってから新入生、卒業生の数は60余人とのこと。今昔の感が一入でした。何しろ我々が入学の時のクラスは10人、2年生が5人、3年生が5人で、全部合わせても20人でしたから（旧制大学は3年制でした）。

今でもやっていると思いますが、対科ボートレース。私達の頃は入学するとすぐ練習をやらされたものです。1年生10人のうち何人かは運動神経未発達なのがいましたから、動けそうなのはほとんど強制的に引っ張り出されるわけです。まづはバック台練習。イギリ

ス風赤練互（注：第二次大戦中の空襲で焼失。ここには実験室や図書室があった。現在の小野講堂のあたり）内の選鉱実験室にバック台が持込まれました。レースはスライディングシートのもが使われるということで、練習台もスライディングシートでした。学院在学中に一度スカルをやったことのあった私は、すぐにこの練習にも馴れましたが、初めての人は、手と足の調子をとるのに一苦労だったようです。

レースの日が近づくと、天気の良い朝には「おい！行こうか」と誰かがいえば話の決めるのは早いもの、クラス委員は早速先生の所へ休講伺いに出掛けます。もちろんOKがでるわけですが、電気や機械など他科の先生の講義はそうはゆかず、欠席のまま実地練習ということもしばしばでした（当時は全科目必修）。

市電（都電ではない）片道7銭で早稲田車庫前（大隈会館裏、バス終点のあたり）から厩橋（蔵前橋の1つ上流の橋）行きに乗り、江戸川橋一大曲一伝通院一春日町一本郷三丁目一上野広小路、ここで浅草行に乗換え（車中で車掌に行先をいうと、市電の路線図の入った大きな乗換券に行先パンチを入れて呉れ、乗換料はもちろん取られません）、吾妻橋で降りてここから漕ぎ上ったものです。時には艇庫まで円タク（どこまでも1円で行くタクシーということでこの名前がつけられたものですが、当時はたったの50銭でした）で行ったこともあります。1～2人でまず円タクをつかまえる、車がとまった瞬間、4～5人が物かげから飛出してきて、あっという間に座席につくわけですが、お巡りさんに見付からないように、体の小さいのが足元に寝ころんでくれ、文字通りすし詰め、1人当り電車賃並み、ということもありました。

ボートから眺める川岸の風景は、今のよう
にコンクリートの樋の中を流れるようなもの
とは違い、両側は土堤。ほんとうに滝廉太郎
の「花」のような、春うららの隅田川でした。

こうした練習の間に、一度市川迄遠漕しよ
うということになりました。私達が使った艇
はD級とかいう6シートで、コックス付のア
ウトリガー型、通常の競走艇よりも幅が広く、
前後にカンバスの代りに板が張られたもので
した。それに補欠2人がそれぞれ乗り、計9
人。コースは言間の艇庫からまず上流へ、綾
瀬(足立区と墨田区の境)から荒川放水路へ
出て南下、新川運河を通過して江戸川に出、そ
こから市川まで行こうということに決まりま
した。

江戸川へ入ってから流れが急になったうえ
に定員オーバーですから、イージーオールに
なると流されて元の所まで戻ってしまう有様
でした。やっと行徳あたりで着岸、持参の弁

当をつかい、引返すことにしました。ところ
が荒川放水路を漕上るのが、また一騒動でし
た。折から引潮で流れは強くなる一方、日は
段々に暮れてくる、腹はへる。ゴーで漕上っ
てもイージーオールで又逆戻り、なかなか綾
瀬の隅田川への水路に行けません。陸上での
運動ならば適当にやめられますが、ボートは
着岸させてそのまま帰るわけにゆきません。

皆もうクタクタでした。ところがおかしな
もので、元気のあった時は仲々オールが合わ
なかったのですが、この頃になると実によく
合うようになったのです。しかしとにかく、
艇庫に着いた時は、もうすっかり夜でした。

この年のレースには、残念ながらこのよう
な苦心は実らなかったのですが、皆いい経験
をした、と今も思っております。青春のいろ
いろな夢の中で、私がみる最も多くの夢の一
つであることだけは確かです。

(昭9. 採治: 元・古河鋳業, 元・上田石灰)

特集 学生にとって「資源工学」とは

早稲田大学理工学部学修要項(1984年)によると、資源工学科は次のように紹介されて
いる。「(前略)従来その技術を行使する場所は炭鉱・鉱山等の領域に限られていたが、(中
略)より広いフィールドに適応し得る技術、および変貌をとげる社会からの多岐にわたる
要請に対応する技術の確立と、その素養を備えた人材の育成が必要となり(以下略)」

採治、鉱山から資源に変わってすでに24年を経たが、さて最近の資源の学生や卒業生は、
「資源」をどのように受止め、消化しているだろうか。その一端を紹介する目的で本特集
を企画した次第。(企画、編集、文責・岩崎)

その1 アンケートの結果から

アンケートの諸条件は次の通りである。

- ①対象: 昭和59年12月1日現在、資源工学科
に在学する3年生以上の学生。
- ②アンケート用紙の配布: 昭和59年12月1日
~12月28日。
- ③アンケート集計: 昭和60年1月10日。
- ④在籍者数当り回答率: 3年生・68%(38/56)。
4年生・37%(27/73)。大学院・35%(8/23)。

質問1 資源工学科に入学をきめた動機

- a: 自分の意志で 3年57%(18/38), 4年74
%(20/27), 大学院87.5%(7/8)。
- b: 何となく 3年21.6%(12/38), 4年15%
(4/27), 大学院はなし。
- c: 親のすすめで 3年8%(3/38), 4年お
よび大学院はなし。
- d: 先輩、先生や知人などのすすめで 3年
2人, 大学院1人, 4年はなし。

e: その他 「すべり止め」, 「(二志で合格したので)仕方なく」, 「ここしか受からなかったから」など。3年3人, 4年2人。

蛇足 「自分の意志で」入学をきめたとするものが流石に多く, 表面的には, 一頃の話題であった「ママコン」は影をひそめている。特に大学院進学者には「何となく」が(数字の上からは)全くない。しかし関連質問「その理由」では, 「二志で合格したから」が圧倒的に多く(3年68.4%, 4年66.7%), 入学の最終決定要因は, かなり「他動」に支配された形跡がある。ちなみに「一志で合格したから」を理由とするものは, 3年2人, 4年33.3%また大学院は「一志」「二志」ほぼ同数であった。

変わったところでは「資源ならばどの大学でもよかった」とするものが4年, 大学院に各1人, 「資源は面白そうだから」(大学院1人), 「大きなことをやってみたい」(3年1人), 「原材料の工学と考えて」(3年1人)などである。

その反面, 「二浪は不可」と親にいわれたから(3年1人), 「早大の理工ならばどこでもよいと思った」(3年, 4年各2人), 「大学ならばどこでもよい」(3年1人)といった切実派, 本音派もある。とはいえ「資源は楽に卒業ができそうだから」を理由にあげたのが, 3年, 4年に各2人あったことは, いささか考えさせられた。

質問2 入学後, 転科や再受験等を考えたことの有無

なし 3年55.3%(21/38), 4年63%(17/27), 大学院75%(6/8)。

〔蛇足〕「あり」と答えたものに具体的な転科先や希望学部または大学名を関連質問したところ, まことに千差万別の結果となった。強いて分別すると, 電気系4人(3年, 4年各2人), 物理系3人(4年), 応用物理系3人(3年2人, 4年1人), 化学系2人(3年),

文系学部2人, 東大1人など(いずれも3, 4年生)。大学院の場合は「他大学の理学部」が1人。

以上のほか「具体的な目標は特になかったがー」とするもの5人であった。いずれにしても学部学生の約半数は, 入学後に転科や転部を考えたが, (それも果せず)「何となく」資源に居坐ってしまったのであろうか。

質問3 資源工学とは如何なる学問分野にあると思うか

a: 主として地下資源の開発と利用の工学分野 3年55.3%(21/38), 4年53%(14/27), 大学院50%(4/8)。

b: 機械, 電気, 化学工学などの工学を基礎とした応用学 3年13.2%(5/38), 4年18.5%(5/27)。

c: 理学と工学の学問分野の混合体 3年8%(3/38), 4年7.5%(2/27)。

d: 要するに「雑学」 3年, 4年各2人, 大学院1人。

e: つかみどころなし 3年15.8%(6/38), 4年, 大学院各1人。

f: 考えたことがない 3年, 4年各1人。

蛇足 ほかに「わからない」が2人(学部)いる。「わからない」と「考えたことがない」とでは意味するところが違うと思うが, とにかくこういう答をする人が存在するということは, 注目に値する。

ところで入学当初の考えはどうだったろうか。資源に対する認識がその当時と現在とでは変わったと思う人に, 「当時はどのような認識であったか尋ねてみた。3年では「つかみどころがなかった」(6人, 15.8%), 「機械, 電気, 化学工学などを基礎とした応用学」(5人, 13.2%), 4年では「主として地下資源の開発と利用の工学分野」と思っていたものが5人(18.5%), 「つかみどころがなかった」は2人(7.4%)とかなり差がある。

一方, 原子力を含むエネルギーや新エネルギー

ギーの開発関連学科とっていた者が3年1人、4年3人あった。

質問4 これまでに履修した科目や参加した(している)行事などで後輩に是非推薦したいもの3つ

3年生：①スポーツのサークル(22人)。②語学(15人)。③数、物、化などの基礎科目、および(専門)実験実習(各14人)。ほかに④現場実習(12人)。⑤早稲田祭(6人)。⑥専門選択科目および文化サークル活動(各5人)。

4年生：①スポーツのサークル(11人)。②数、物、化などの基礎科目(10人)。③語学(8人)。ほかに④専門実験実習(6人)。⑤現場実習および文化サークル活動(各5人)。

大学院：①現場実習(5人)。②語学、専門実験実習、スポーツサークル、および資源主催のコンパ(各3人)。

蛇足 各学年共通してあげたベスト3は、スポーツ関係サークル活動、語学、数、物、化などの基礎科目。サークル活動は別として語学や基礎科目は、1、2年生の頃に相当いじめられた記憶から、後輩への「警告」の意味もこめられていると思う。大学院在学生在が特にこれをあげないのは、進学にあたって基礎科目は当然身につけてなければならない、という考えが基調になっているためか。

専門の実験実習、現場実習なども高い推薦率を得ており、中でも現場実習は大学院で、推薦第一位となった。

いわゆる選門科目や人文社会、自然科学などの教養科目よりも、早稲田祭やスポーツ大会などの推薦率の方が高いのは、「授業」という名の画一性に対する反発であろうか。その他の希望として、「討論会」、「(先輩との)交歓会」、「学科主催のスポーツ大会」「何でもよいからサークルに1つ入ること」「コンパ」などがあげられた。

アンケート・あとがき

アンケートは以上のほかに就職問題についても触れたが、4年生以上については別に一括紹介するので、ここでは省略する。ただし4年生の場合、希望通りの就職ができなかった「不本意組」の、はじめの希望職種は公務員(3人)が目立った。なおこの3人は結局全員大学院に進学という方向を選んでいる。

3年生の場合は、就職に関してはまだ何か他人事の様子で、特に方向性を意志表示していない。強いてそれをさぐると、残念ながら「鉱業」はゼロ、以下「大学院進学」、「セラミック・窯業」、「公務員」、エンジニアリング、商社、といったところ。

鉱業関係からの求人が激減(石油開発、石灰石等を除き)、(学生にとっては)目玉と思われていた海外の鉱山開発も意外や伸び悩んでいること、そしてほとんど全国的ともいえる中産階級趣味、ソフト志向など、就職動向への影響力は相当に大きい。ともあれ多くの学生が、資源工学を「主として地下資源の開発と利用に係る工学分野」と認め(質問1の回答結果)、「自らの意志」で資源を選んでみたが、市場は買手だし、無理して泥にまみれて資源開発の道を選ばなくても、という大勢に対して、昔の採治的、あるいは鉱山的な感情だけで、単純に「この格好よがり奴」ときめつけるのは酷であろう。

一方、また多くの学生は(現実面から)数、物、化などの基礎科目や専門の実験科目、二度と体験できぬかも知れぬ現場実習などを重視するよう後輩に助言し(質問4の回答結果)サークル活動やコンパなどを通して人心に接することの必要性を認めている。これはむしろ「学修要項」にあるように、「……従来の鉱山の枠を越え、(中略)社会からの多岐にわたる要請に対応し得る技術の確立(後略)」に不可欠の策であると認識している証拠かも知れない。

その2 女子学生の「資源工学」

資源工学、資源開発工学という名称の学科を持つ大学は全国で11校（秋田大学だけは鉱山学部採鉱学科）、そのうち女子の入学—卒業が定着化した大学は、現在のところ早稲田ただ一校であるが——。

昭和59年、大学院博士後期課程途中から社会人として巣立られた（現、教育学部助手）小棹理子氏に、「私にとって資源工学とは何であったか」のテーマで一文を寄せていただいた。

小 棹 理 子

資源工学科に在籍すること10年——時の経つのは早いもので、この3月には、同期の人が皆、資源工学科から巣立ってしまうことになります。

省資源・省エネルギーが唱えられ始めて久しくなりますが、1970年代半ばというと、エネルギー開発の華やかな頃で、サンシャイン計画などが大いに脚光を浴びていました。そうした中で、大学受験を迎えた私は、時代の波に乗るべく、本学科を志望しました——等と書くと、かっこいいのですが、自分に合ったところに通るだろう、という半ば運命論的な不純な気持ちで志望校を選定したのが実情でした。その見返りか、いざ入学してみると、そんな甘いものでないことがわかりました。資源工学科で紅一点、というと、聞こえはいいのですが、やはり異常な環境でした。1、2年は語学クラスが主体で、EEクラスには私も含めて女子計5人がいたものの、昼食に食堂に行くのに男子ばかりの中庭が一人で横切れなくて、女子全員が揃うのを待つ、という有様でした。全く見知らぬ人に“ブス！”と呼ばれたり、男性諸氏にはわからない悩みもあったものです。しかし、3年ともなると、皆それぞれ専門も大変になり、悠長なことも言ってもらえなくなり、堂々と闊歩するようになりましたが——

少々話がそれました。さて、私にとって資源工学とは何であったか。まず第一に“工学”そのものの考え方を身につけさせるものであったように思います。現在、教育学部理学科に勤めさせて頂いておりますが、“学際”が強調されている今日においてもなお、“ナゼ”のみを追求する理学と、“ソレデ”を必要とする工学は、やや対象へのアプローチの仕方が異なるように思えます。私の場合、対象は天然鉱物で、この結晶化学的・熱的性質を明らかにすることを目指しておりますが、純粋な鉱物学と異なるのは、工業的に利用する上で必要な性質を示す、ということが前提として存在する点だと思えます。この点で、私の大恩師、大塚先生のおっしゃられる鉱物工学という専門分野は確立すべき分野であり、私もまた、踏襲してゆきたい、と思っています。

第2に、“鉱山”という、日本では女性に対して非常に閉鎖的である部分を教えてくれたものである、ということ。残念ながら、鉱山実習は経験していない為、本質的な理解には及んでいないと思えますが、鉱床・探査、採鉱、石炭技術、鉱山機械、選鉱・選炭、冶金、等の言葉に少なくとも馴れたのではないかと思います。

また、鉱山にアルコールはつきものです。私自身は飲めないのですが、第3点として、ここから大切なことを学んだように思います。それは、資源工学科の先生方の温かさと大きさです。これも、他の国立大学や学科では恐らく得られなかったであろう貴重な経験でした。

以上のように、資源工学は、私の進むべき道、（大げさですが）——鉱物工学（熱分析）、さらに、人間的に大切な事、までも示唆してくれたように思います。

【注】ほかに今春卒業の3女子学生にも、同じ課題で寄稿をお願いしていたが、残念ながら期限切れ。企画ミスを心からお詫びする。

その3 卒業論文テーマにおける資源工学

ワセグウイスキーの製造に熱中(?)したかつての卒業研究は、今、どのように変わったか。なおテーマ末尾の(修)は「修士論文」を示す。また以下のテーマは昭和59年度分、「分類」は編集子の独断と偏見による。

分類: 岩石・鉱床 **指導教員:** 今井直哉

- ①韓国第一花連鉱山の銅磨鉱床産含銀鉱物について。
- ②韓国第一花連鉱山産閃亜鉛鉱の化学組成の変化。
- ③韓国蔚山鉱山地域の超苦鉄質岩、およびこれに伴う優白質岩類について(修)。
- ④EPME 定量分析における補正電算機プログラムの改良。
- ⑤佐渡小木炭酸塩岩について。

分類: 物理探査 **指導教員:** 野口康二

- ①マグネットリック法による地下比抵抗構造解析, ジョイントインバージョンテクニックを使った次元解析法。
- ②スペクトルIP法におけるデータ処理について, 主としてスプライン関数を使った近似。

分類: 鉱物化学 **指導教員:** 大塚良平

- ①電解二酸化マンガンの研究, 特に加熱に伴う発熱気体について。
- ②電解二酸化マンガンの結晶化学的研究(修)。
- ③X線粉末回折形のシミュレーションによる天然産 Natrolite 系沸石の脱水機構の解析。
- ④天然産 Stellerite 系沸石の陽イオン置換に伴う鉱物化学的諸性質の変化。
- ⑤キレート試薬によるセピオライトの化学的処理, 特にアルカリ側について。
- ⑥セピオライトの結合水の脱水機構。
- ⑦炭酸水酸アパタイトの結晶構造解析。
- ⑧水酸アパタイト焼結体の製造プロセスにお

ける微構造観察。

分類: 開発・鉱山評価 **指導教員:** 萩原義一

- ①東山油田坑道採油に関する油層評価。
- ②レベル以下の開発の場合の運搬法に関する研究。

分類: 岩石力学 **指導教員:** 橋本文作

- ①ゼイ性機料の時間依存の変形のシミュレーション。
- ②BEM の弾性問題への応用。
- ③大形岩盤斜面の安定性。
- ④圧裂引張試験における破壊断面の応力状態。
- ⑤節理性岩盤のモデル化とその透水性の評価(修)。

指導教員: 野口康二

- ⑥生産発破による残壁の振動挙動。

分類: 石油・採油 **指導教員:** 山崎豊彦

- ①水銀圧入による油層岩の孔隙分布測定法の研究。
- ②ポリマー攻法に関する研究。
- ③水溶性界面活性剤による原油回収率の向上に関する研究。
- ④オイルサンドの水蒸気溶剤による原油回収率の向上に関する研究。
- ⑤Berea Core による低濃度界面活性剤攻法に関する研究(修)。

分類: 選別・事前処理 **指導教員:** 原田種臣

- ①数種の窯業原料鉱物の粉碎性と硬度に関する研究。
- ②数種の硫化鉱物の粉碎性と硬度に関する研究。
- ③バクテリアによる石炭の脱硫。
- ④豊羽鉱山産黄鉄鉱の浮選性に及ぼす表面物性の影響の解析。

指導教員: 房村信雄

- ⑤製鋼ダスト再利用のための基礎的研究。

分類: 岩石物性 **指導教員:** 萩原義一

- ①高温条件下の岩石物性, 特に高温岩石の弾性波伝播特性。
- ②人工亀裂面を含む試料岩石の力学的性質に関する基礎研究(修)。

指導教員：岩崎 孝

③細骨機の吸水性に関する基礎的研究。

④骨機のアルカリ反応に関する基礎的研究。

指導教員：野口康二

⑤花こう岩の風化に関する研究。

⑥神岡鉱山における岩石の諸特性。

分類：安全衛生 指導教員：房村信雄

①各種粒度分布測定器の粒度分布特性の比較研究。

②改良型黒球温度計による輻射熱測定に関する研究。

③透過ノマルスキー微分干渉顕微鏡による各

種繊維状物質の識別と定量に関する研究。

④パーソナルダストモニターシステムの作業環境における実用化に関する研究。

指導教員：岩崎 孝

⑤岩石の付着水分がクラッシングプラントの粉じん抑制に及ぼす影響。

分類：環境保全 指導教員：岩崎 孝

①発破粉じんによる汚染範囲の特定に関する基礎研究。

②コンピューターグラフィケーション手法を用いた採石場のリクラメーション計画。

資源工学会会計報告

(昭59.4.1~昭.60.3.31)

(1)取 入 2,129,604円

〈内訳〉 a. 繰越金	964,275
b. 59年度会費	554,000
c. 名簿売却代	13,200
d. 利子	23,129
e. 総会参加費	460,000
f. 伏見先生記念品基金	115,000

(2)支 出 1,220,317円

〈内訳〉 a. 印刷代(含会報)	208,445
b. 名簿送料	350
c. 切手代	3,160
d. 59年度会報送送料	63,540
e. 幹事会経費(3回分)	46,141
f. 祝儀袋	600
g. 会報発送アルバイト	7,200
h. 謝金	20,000
i. 総会支払い	748,880
j. 伏見先生記念品	115,000
k. その他	7,001

(3)差引残高 909,287

卒業生の進路(昭和59年度)

同一個所に複数就職は()内に人数を、大学院は*印(外数)でそれぞれ示す。

機械・金属 10人, * 2人

旭光学(2), 住友金属工業, 諏訪精工舎(2, * 1), 日立製作所(2), キヤノン(1, * 1), リコー, 日本光学。

窯業・ガラス 3人, * 1人

伊奈製陶, 吉野石膏, 京セラ, 旭硝子*

石油・ガス(除開発) 4人, * 1人

京葉瓦斯, モービル石油, 三菱石油, 昭和シェル石油, 石油公団*

石油開発 3人

海外石油開発, 帝国石油, 石油資源開発

コンピュータ・情報処理 8人, * 1人

富士ファコム制御, 野村コンピュータシステム, 日本IBM(2), 広島コンピュータサービス, 横河ヒューレットパッカード, 丸紅ハイテック(1, * 1)

化学 5人

エクソン化学, 信越化学, 積水化学工業, TDK(2)

電気 5人

日本電気(2), 松下電器産業, 日本ビクター, ソニー

鉱業(含地熱, セメント) 6人

三菱金属鉱業, 古河鉱業(2), 住友セメント, 日本重化学工業, 小野田セメント

商社 2人

フジ・マシナリー, 極東貿易

プラントエンジニアリング 3人

新菱冷熱, 日揮 (2)
広告・出版 2人
フジ・サンケイリビングサービス, いのち
のことば社
銀行 3人

大和銀行, 三菱銀行, 第一勧銀
大学院 修士12人, 博士 * 1人
早大 (10, * 1), 東工大, 東大
その他 2人, * 1人
特許庁, 自営, 早大教育学部助手 *

資源工学科の1年

入学式(4/2), 始業式(4/3)。入学登録者数
74人(女子4, 高校推薦6, 学院, 早実, 早
高各1)。担任・原田教授。

伏見弘氏の名誉教授推薦。主任会です承, 決
定(4/18)。

資源工学会総会。於大隈会館(4/27)。伏見弘
氏の名誉教授就任等報告。

新入生オリエンテーション。於追分セミナー
ハウス(5/26~27)。

樋口恵子氏(事務職員)退職。後任に高山真
理子氏就任(5/31~6/1)。

大学院 博士前期課程(修士)推薦。8人の推
薦を了承(6/21)。

外国人特別研修生受入れ。研修生, Ki-Hyung,
Lee(韓国)。受入担当・今井, 大塚教授。

編集後記

本当に久々に, というよりも“はじめてのケース”というべきでしょうか。大先輩・西尾吉
衛氏からの投稿(昨年5月15日付)をいただきました。一刻も早く会員各位に紹介いたすところ
でしたが, 会誌発行の都合から今日まで延び々々になってしまいましたこと, 深くお詫び致
すと共に, 厚くお礼申し上げます。ともあれこれを機会に, 会員各位からの活発な「投稿」(依
頼ではなく)を期待いたす次第です。

「特集」と銘うったものの, 何か尻切れとんぼになってしまったようで申し訳ありません。
とはいえ, 「資源」の若者達はいま何を考え, どのように学生々活を送り, そして卒業してゆ
くか, 多少なりともおわかりいただき度く。またその若者達, および教室をあずかる者達に,
先輩各位からのご意見がうけ賜われれば, まことに幸いと存じます。

(岩崎記)

〒160 東京都新宿区大久保3-4-1

早稲田資源工学会 早稲田大学理工学部資源工学科内 電話03-209-3211内線2137

振替番号 東京1-143534

協和銀行早稲田支店 普通141-322760